会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」  （２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第1回ICT活用研修WG |
| 開催日時 | 令和3年7月26日（月）　13時00分～15時00分 |
| 場所 | オンライン開催 |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾  委　　　員：猪俣　昇、岡村　慎一、菊池　裕生、岩﨑　千鶴、合田　美子  長瀬　あゆみ、中田　明子　　　　　　　　　　　計8名  請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計9名 |
| 議題等 | 1. 事業概要（岡村）   昨年から引き続き「職業実践専門課程を通じた専門学校の質保証向上の推進」を目的とした3つの事業を進めている。この事業はPDCAの中のCAの部分、教育改善に向かうための教員の質保証、教員研修に取り組んでいる事業の一つとなる。エビデンスを取ることも含めて個別最適化をしていくための教育手法としてICT活用にフォーカスした開発をしていく。学生に対して授業をしていく中で“学習者主体”にフォーカスした時、個々の学生の状態をどのようにデータを取りフィードバック（学習支援）していけばいいのか、そのためにインプット・アウトプット手法にどのようにICTを活用したらいいのか、個別に対応するための教員側のICT活用方法、その3つの視点を含めながら教員が身に付けるスキルを提案し、継続的に学び続けられるような研修プログラムを開発できればと思う。教員研修事業としては、2本のプログラム開発を予定している。もう一方の非認知能力にフォーカスしたプログラム開発と合わせて、職業教育の場で専門学校が強みをアピールできるような人材育成になっていくと考える。今年度はアウトプットとして様々なワークショップ行動計画が必要になるので、皆さんの積極的な推進をお願いしたい。   1. 自己紹介（高岡、猪俣、菊池、岩﨑、合田、長瀬、中田、飯塚） 2. ICT活用研修WG今年度の取組予定・到達目標（猪俣）   ・ICT活用WGは、今回、9月、11月、1月、2月の5回開催予定。年度後半は対面開催を予定している。  ・昨年度は、アダプティブラーニングに関する実態調査をアンケートで実施、そこから抽出された学校にヒアリング調査を実施した。今年度は、ケーススタディ作成のための視察調査を2か所、それを踏まえアダプティブラーニング教授法のプロトタイプ版を開発、アダプティブラーニング教授法を修得するための研修プログラムの開発、また検証研修を東京と新潟で2か所の実施を予定している。  ・当WGと学習評価WGで教員研修プログラム開発委員会が構成されている。  ・スケジュールとしては、8つの項目をプロットしている。実証研修になりうる教材としてケーススタディの2本作成を予定している。深堀事前調査に関して9月・10月、事前調査の報告書と実証講座開発を10月・11月、実証講座の実施を12月、その後検証に入る。実証講座開発は、授業デザイン、ICTツールを活用した学生⇔先生の個別コミュニケーション方法とICTツールを活用した学生同士、学生⇔先生のピアラーニング方法をビデオ教材で、ビデオ教材を使いながらケーススタディ方式の学習計画作り、コーチング、アセスメントを考えている。  ・事前調査では、ケーススタディの候補として、デジタルハリウッド大学大学院と山野美容芸術短期大学を考えている。  【課題・意見等】  ・ケーススタディの候補に専門学校を入れたほうがいいか。  →専門学校を入れる際、候補はあるか。（高岡）  　→昨年度の調査校の中からと考えている。河原デザイン・アート専門学校、専門学校中央医療健康大学校、山野美容専門学校、トライデントデザイン専門学校が候補となる。実技科目の授業、多様な目標設定を考慮して現在の候補を選んだ。ただ、授業外の生活指導などの事例は含まれておらず、授業内のアダプティブラーニングという設定を考えている。候補2校は「目標設定をした上で学びに必要な要素を考慮し授業設計をしていく」特徴がある。（猪俣）  　→専門学校の中では特徴的な学校はあったか。（高岡）  　→専門学校中央医療健康大学校ではワークシートを使用しシステマチックなやり方、トライデントデザイン専門学校は属人的な印象、山野美容専門学校は授業外活動での取組が特徴的だった。（猪俣）  　→ヒアリング結果から考えると、研修内容を考える時に専門学校を考慮すればケーススタディに専門学校を入れなくても良いと考える。（高岡）  →山野芸術短大の事例を聞いて非常に勉強になったのでさらに深堀したい。（長瀬）  →専門学校ではまだ先進的な事例がないので、候補2校の事例を深堀していくと良いと考える。（岩﨑）  →参考になるのであれば、専門学校という括りでなくても良い。（菊池）  →同意。（中田）  →この2校を深堀してどのような形で活用するのか。ケーススタディとしては、親近感があると参考にしやすいと思うが、要素だけの抽出となるのか。（合田）  →ある特徴的な学生の「科目履修スタート～履修途中～単位習得（目標達成）に至る実例」のストーリー化を考えており、ポイント抽出という形は考えていない。各校1事例で2事例を考えており、学生への適切なコーチングのためにどのような対応したら良いかという課題の素材にしたい。（猪俣）  →大学や短大の事例としてではなく、専門学校に置き換えたほうが入りやすいと感じる。（合田）  →昨年の事業報告で、研修プログラム開発のポイントとして、1から7までのマインドセットからICTの基礎リテラシーが挙げられている。その上で授業準備、授業内外での学生との関わりを追加したプログラムを開発するとあった。それを踏まえた上で授業デザイン、コミュニケーションが学べるケーススタディと考えて良いか。候補2校双方とも昨年のヒアリングでは、内的動機付けがない学生には対応できていないという回答があったので、そこを考慮すると専門学校向けとしては足りない部分があるのではないかと感じる。学生・生徒へのアプローチを考えると「専門学校の先生方がされている工夫」などや、「エビデンスを取るためにどういったICTを使うか」などがポイントとなるのではないかと感じている。両校とも授業設計に関するICTの活用方法で、能動的な学生にはアプローチできるが、そうではない受動的な学生へのアプローチ方法が専門学校向けに欲しい。（岡村）  →昨年度のヒアリング内容では、そのまま専門学校に向けるのは無理があると感じた。また、学生達の実績を広報に繋げる部分なども足りないと考える。現場の教師は受動的な学生のやる気を引き出す方法などが課題となっている。（高岡）  　→昨年度、専門学校中央医療健康大学校でのヒアリングで、退学者の減少に繋がる取組があった。その様な部分が専門学校には有能なアダプティブラーニング。マインドセット、事前アセスメントをどのように授業に落とし込むか、先生方がどれだけ事前アセスメントをインプットして授業に臨み個別対応をしているか工夫があると思うので、そこを深堀しても良いと思う。（岡村）  →昨年度報告した「アダプティブラーニング教授法研修に求められる構成要素」は候補2校ではまかないきれない。再度ピックアップが必要。実証講座の概要で上げているICTツールはケーススタディ候補の2校が使用しているもの。特にこだわらなくても良い。（猪俣）  　→専門学校では受動的な学生が多く、試験や就職活動などさらに高い目標に向けたモチベーション維持が難しい。そこを考慮したケーススタディがあると良い。（長瀬）  →受講した教員みんなが活用できる研修内容にするためには、精神的な部分も入れたほうが良い。（岩﨑）  →皆さんの意見を聞いて、「学生へのアプローチ」「ICT を活用した具体的な授業手法」に重きを置いた研修内容が重要と感じた。（猪俣）  →実際の現場を見ていると、ICTの基礎リテラシーの前段階、各ツールの特徴などの説明は必要だと感じる。ICTを活用していない所ではきっかけがつかめない。（高岡）  →ICT基礎リテラシーの項目は“How Toもの”の紹介などでも良いかと思う。学生層が多様な専門学校では、経験値ではない事前アセスメントのやり方が提案できると良い。（岡村）  →事前アセスメントのやり方は、「ビリギャル」著者の人間タイプ判定アプリなどを活用しても良いと思う。事前アセスメントの結果をどのように活かしていくかが大切。（高岡）  →事前アセスメントのやり方は昨年度のヒアリング調査では事例を得られなかった。山野美容芸術短期大学の応用行動心理学では、学生の行動を踏まえての対応。（猪俣）  →当社での研修は、設計する際に受講者についてのヒアリングを実施し、3つのタイプに分け、そのタイプごとに響くような説明の仕方・声掛けや内容を設計している。コーチング研修では、市販の事前アセスメントを実施している。（中田）  →行動分析学の背景には見えないものもあり、それを可視化するためにICTを活用し合理的・効率的に判断できるか、というところがポイントだと考えている。（岡村）  →教師の人間性にもよるので難しいと感じるが、中田さんがおっしゃったようなやり方などヒントが提案できれば、教師にも働きかけができる。今後の教師の役割は、学問を教えるだけではなく人材育成も含まれてくるので、重要なテーマになると考える。（高岡）  →学習攻略などでもタイプ分けがあるが、実践で役に立つというイメージが無い。「大福帳」というミニットペーパーのような学生と教員の一対一のコミュニケーションツールがあり、学生の記入に対して教員がコメントを返すことができ、記入内容は教員から返されたコメントと対になって表示され、学生ひとりひとりの学習の記録となる。そのような学生と教員のやり取りをケーススタディとして、どのような対応をしたらいいか実践すると力が付くのではないかと考える。（合田）  【課題まとめ】  ①ケーススタディの在り方（対象、内容、作り方）、研修内での演習方法が課題  ②専門学校の特徴の一つとして、必ずしも目的的な学生ばかりではない。 「やる気がなく、学習も苦手な学生」「やる気はないが、学習はやればできる学生」「やる気はあるが、学習が苦手な学生」という学生も存在し、これらに対して落ちこぼれを作らない、寄り添った個別最適なアプローチが必要  ③デジハリ石川先生事例には②の面で不足がある（大学院事例のため）。それゆえ、石川先生モデルをそのまま専門学校で再現は難しいのではないか。※ちなみに山野美容芸術短大の秋田先生事例は②の多様な学生を対象にしたもの  ④専門学校中央医療健康大学校の大石先生事例は、国家試験の結果伸び、退学率改善といった成果に導いたコミュニケーション過程があるのではないか。  ⑤エビデンスベースドなアプローチをする上で、最初期のアセスメントによるタイプ別検討も有りだが、過程の記録（定量、定性）をベースにしたコミュニケーションスキル（しかもITツールを使って常時）も重要ではないか（大福帳案）  ⑥昨年度報告の結論であるアダプティブラーニング構成要素8つのうち、今年度注目すべきは「学生へのアプローチ」「ICTを活用した具体的な授業手法」の2要素かと思われる。 残り6要素の扱いは以下の通り  ・マインドセット…教員のアダプティブラーニングへの興味、理解。これらを持っている方が研修対象。  ・事前アセスメント…経験＆勘排除のために外部のテストサービス利用事例多数。研修で扱いにくい。  ・授業設計…IDをテーマにした他研修が既に有り  ・ eラーニングコンテンツ制作…過去に扱ったテーマ  ・評価基準と学習過程/成果の可視化…評価基準と成果可視化はルーブリック作りがテーマ。  ・学習過程の可視化は、「ICT活用で過程のコミュニケーション」視点では今年度取り入れられる  ・ICTの基礎リテラシー…前提条件。これらを持っている方が研修対象。   1. スケジュール（猪俣）   ・第2回ICT活用研修WG…9月6日（月）12時～14時  　＠専門学校山情報ビジネス学院（オンライン開催併用） |
| 配布資料 | ・令和3年度事業計画書  ・FY2021スケジュール\_20210726  ・アダプティブラーニングに関する実態調査報告書 |

以上